

(第3号様式)

## 学 位 論 文 要 旨

氏 名 岡田 知久

論 文 名 新しいガイドラインと FDG PET/CT によって診断された心臓限局性サルコイドーシスの臨床的特徴と予後

---

### 学位論文要旨

#### 【背景】

サルコイドーシスは原因不明の全身性肉芽腫性疾患である。日本においては心臓サルコイドーシス（CS）の有病率が高く、サルコイドーシス患者の死亡の 77% が CS に関連していると報告されている。CS に対する早期のステロイド治療介入は予後を改善するといわれており、早期診断が重要である。孤立性心臓サルコイドーシス（iCS）は、他の臓器にサルコイドーシス病変が認められない CS であり、従来、iCS の診断には心筋生検による病理学的確認が必要であった。しかし、CS を診断するための心筋生検の感度は約 20% であり iCS の診断は困難であった。2016 年に日本循環器学会から iCS の組織学的診断を必要としない臨床診断基準が提唱された。この診断基準において FDG PET/CT は必須基準に含まれている。iCS のまとまった報告は少なく、特にこの新しいガイドラインによって診断された iCS の報告はほとんどない。

#### 【目的】

新しいガイドラインによって診断された iCS の FDG PET/CT 画像所見と予後の評価を行うことを目的とした。

### 【方法】

本研究は当院および愛媛県立中央病院の2施設での後ろ向き研究として計画された。2009年4月から2020年3月までの期間にCSが疑われ専用のプロトコルでFDG PET/CTが撮影された連続患者306人をレビューした。ガイドラインによってCSと診断され、心臓にFDGの異常集積を認め、6ヶ月以上のフォローをうけた患者を対象とした。PET検査前に免疫抑制療法が開始された患者と心筋梗塞の既往がある患者は除外した。82人の患者（心臓外病変をもつ心臓サルコイドーシス（sCS）：55人、iCS：27人）が研究に含まれた。

SUVmax や Target to background ratio(TBR)など FDG PET/CT の画像所見を2群間で比較した。また、CSタイプと心臓有害事象の発生率との関係を調べた。

### 【結果】

iCS群はsCS群よりもSUVmaxおよびTBRが有意に低かった (SUVmax: 5.3 [4.6-9.4] vs. 9.8 [5.7-12.0],  $P = 0.0032$ ) (TBR: 3.6 [2.8-6.4] vs. 6.9 [3.8-8.8],  $P = 0.0010$ )。

iCS群はsCS群よりもevent-free survivalが有意に低く ( $P < 0.0001$ )、iCSは有害事象の独立した予後因子であった(ハザード比 3.82,  $P = 0.0059$ )。

### 【結論】

iCSはCS患者の心臓有害事象の独立した予後因子であった。FDG PET/CTと新しいガイドラインに基づくiCSの臨床診断はiCSの早期診断および治療介入に有用である可能性がある。

なお、本研究は愛媛大学医学部附属病院の倫理委員会および愛媛県立中央病院の臨床研究審査委員会によって承認されている。

キーワード（3～5）	心臓サルコイドーシス 心臓限局性サルコイドーシス FDG PET JCS 2016 ガイドライン 予後
------------	---